日本体育大学紀要 36 巻 1 号 (2006) 19-28

[原　著]

チェロキー族の球戯の構造と機能に関する研究
—R. Foglson[1] によるフィールドワーク（1957 年と 1958 年）を基本資料として—

松　浪　登久馬*

（2006 年 5 月 8 日受付，2006 年 8 月 18 日受理）

A Study of Cherokee Ball Game
—Mainly on Field Work of 1957 and 1958 of R. Fogelson—

Tokuma MATSUNAMI

The purpose of this study is to examine the stick and ball characteristics of ball game among the Cherokee.

I mention it with this from social history and a viewpoint of the natural history while using the work that an american anthropologist did for native American till now as a document.

At first I describe a ceremony to be concerned with by holding of a ball game first and I inherit it and describe a function of a ball and a stick.

Key words: Ball game, Ceremony, Ball, Stick

キーワード: ボール・ゲーム，儀式，ボール，スティック

I. 研究の意図と着眼点

現在，世界規模で展開されるようになった近代スポーツとしての球技 (ballgame) のほとんどは，それぞれ明文化されたルールを持ち，互いにそれを共通理解することによって，成立している。そのためルールさえ理解していれば，たとえ言語が異なる民族同士であってもその球技を行うことができる。このことはスポーツが異なった文化圏の人びと同士が交流する場を提供しうることを意味していよう。こうした近代球技の世界展開はヨーロッパの植民地政策を主な背景にしているのであるが，これが展開される中で土着の球戯 (ball game) は逆に，それぞれが持ちあわせていた個性をしだいに失うようになった。球技が肉体的にも技術的にも優れた選手を擁して戦略と戦術を駆使して勝敗を決するものである一方，球戯は選手の選抜から試合の勝敗に至るまで重要な要素として呪術に依存し，定型化した儀礼を執り行いながら進行するものであった。こうした儀礼は土着の風土によって醸成された宗教によるものであることから，これを理解せずに本当の意味での異文化としての球戯を理解することはできないと言えよう[2]。

文字をもたない北米先住民族 (Native American) の文化は，口伝によって伝承されてきた。そのためアメリカ合衆国におけるヨーロッパ人の入植によって彼らの文化は変化させられるか，消失を余儀なくされたが，それを自身で正しく記録する術を持ちあわせていなかったといえる。そこで 1842 年にスミソニアン研究所 (Smithsonian Institution) はそれら先住民族の文化を記録・保存をするために同研究

* 体育研究所

所内にアメリカ民族学局 (Bureau of American Ethnology) を設立している[3]。この部局は年次報告を発行していたが，その第24年報の中で S. Culin は『Games of The North American Indian』(北米先住民のゲーム）を発表した。そこでは球戯は122部族195例が取り上げられ，それらはさらにゲーム特性から10群に分類された。この北米先住民族が所有していた多種多様な球戯に関してスケッチ等を交えて記録したことから，この報告は記念碑的な地位を確固たるものにした。しかし，その後，単行書として刊行されたが，一定の視点に立って編まれたものではなかったといわねばならない。

現在，北米先住民族の球戯はチョクトー族のような例も見られるが[4]，表面的にその形式を真似ているにすぎず，そこには彼ら先住民族が所持していた従来の宗教観はわずかに垣間見られるにすぎない。

チェロキー族 (Cherokee) は a·ne·tsó[5] と呼ばれる球戯を行っていた。現在では，10月の第1週に開催されるチェロキー・フェアで行われている。彼らはヨーロッパの入植にも友好的な部族であり，後にアルファベットを真似た独自の文字を発明し，それを用いた新聞を発行したことでも知られている[6]。

当該球戯は S. Culin の分類の中でラケット (racket) に分類されるものであるが[7]，現在のラクロスに類似したゲーム特性を有する。ラクロスが防具を着用し，各選手が1本のスティックを用いて行うのに対して，a·ne·tsó は防具の着用はなく，スティックは各選手が2本を用いて行う。また，ラクロスは決められた試合時間の中でどちらが多く得点したかによって勝敗を決するのに対して，a·ne·tsó は先に決められた得点を取った方の勝ちとなる。フィールドを区画する線は引かれていないが，観客とフィールドの間に一応の境界線が設定されている。しかし，これは尊重されず，興奮した観客はたびたびこれを超えてフィールドに侵入した。逆にボールがこれを超えて観客側に入っていったとしても，選手はこれを追って試合を継続した。フィールド中央にはバスケットボールやサッカーに似た円形の区画が設けられる。これはゲーム開始のティップオフの場として設定され，試合開始時にはティップオフをする選手と審判だけが入ることが許される。

ルールらしきものと言えばボールを持って投げてはならないくらいで，相手選手の妨害に対してスティックを使うことを禁止しなかったし，乱闘になったとしても反則にはならなかった。人数の制限はなかったが，試合開始前の話し合いで同数同士に調整して開始することが決まっていた。ゴールはフィールド中央の円形区画から等距離に設定されるが，その距離は試合開催前に話し合いで決められる。

このチェロキー族の球戯 (a·ne·tsó) についてこれまで，S. Culin に先駆けて J. Mooney が論及している。彼は『The Cherokee Ball Play』(チェロキー族の球戯）と題する研究書を発表し，1889年の9月に観察した当該球戯について，実施の過程から球戯に関する神話に至るまでを詳述している。さらにこれを紹述し，より立証的な検討を加えたのが R. Fogelson であった。彼は1962年に博士学位請求論文として『The Cherokee Ball Game: A Study in Southeastern Ethnology』(チェロキー族の球戯：南東民族学の研究）を提出した。その中で彼は文化人類学的見地から，球戯とそれを行う民族との関係に宗教観が切り離せないものであったことを明らかにしている。しかしさらにふみこんで，使用される用具の構造や機能に関する問題についてまでは残念ながら言及されていないと言わざるをえない。当該球戯は開始から終了まで呪術的要素が常に付帯され，用いられるスティックとボールにも色濃く彼らの宗教観が反映されていたと考えられるのである。

当時のアメリカの文化人類学界において消失・変容しつつあった北米先住民族の文化が記録・保存されてきたにもかかわらず，歴史学はこれを顕著に取り上げてこなかったと言わざるをえない状況である。すでに述べたように彼らは過去の記録を口伝の伝承に依存している。伝承の過程でその記録が塗り替えられている可能性は否定できないが，彼らの過去を再構成する上で見過ごすことのできない貴重な資料である。社会の歴史を埋める作業という意味でもこれを扱って進めていくことと，加えて膨大な量の北米先住民族球戯について，これを一定の視点を持って分類する作業は明らかに必要な事柄であると言わねばなるまい。

そこで本研究はチェロキー族が球戯 (a·ne·tsó) で使用したスティックとボールの構造と機能について検討を加えようとするものである。

なお，文中に用いる長さの単位はヤードーポンド法を用いて表記した。

II. チェロキー族の球戯に関わる呪術

1) 選手の選考

選手の選抜方法に先立って，まずはチェロキー族の球戯のポジションについて触れておきたい。これは R. Fogelson によって近代的なポジションの名称がつけられている（図1)。加えて彼の視点からポジションに必要な能力の説明もなされている[8]。ここで描かれているのは10人制の場合である。構成は1人のセンター・ファイター，1人のショートストップ，4人のフィールダー（高い側と低い側に分類される)，4人のホーム・スティック・プレイヤー（自陣側と敵陣側に分類される）である。センター・ファイターに必要な資質は大きくて強いことであり，大抵の場合，チームのキャプテンを務めている。相手のセンター・ファイターと対等にやり合うことができなければ自チームが不利になるほど，フィールド上で最も重要なポジションだと考えられていた。ショートストップはティップオフ時にフィールド中央の円形区画周辺を徘徊し，弾かれたボールを拾い上げることが第一の任務で，ここで求められる資質は機敏で軽快な機動力を持っているということである。フィールダーは素早く移動しながらボールを拾い上げる能力を基礎に選ばれ，ホーム・スティック・プレーヤーは得点能力を大きく期待された。

こうしたポジションに振り分けられる前に試合に出る人員の選抜が行われる。試合の開催が決定すると長老の中からマネージャーを選出・任命し，マネージャーは主に試合の運営に関する人員調整を行った。最初の使命は試合に携わる呪術師を選び出し，依頼することで，代表候補のプレーヤーは呪術師によっていくつかのタブーを課され，これを犯した選手は即刻，代表チームから外されて他の候補選手と交代しなければならなかった。

タブーの大部分を占めるのが飲食に関係するもので，ウサギは自身以外の生き物が近づくと逃げ出す臆病な動物と考えられており，その肉を食べることはウサギの臆病さが選手に乗り移ると考えられ禁止されていた。この一方で，ウサギの素早さが乗り移ると考えることも可能であるが，球戯に関する神話の中で，チェロキー族にとってウサギは好ましい存在ではないことが示されている[9]のである。

また，カエル，雛鳥といった生物を食することも

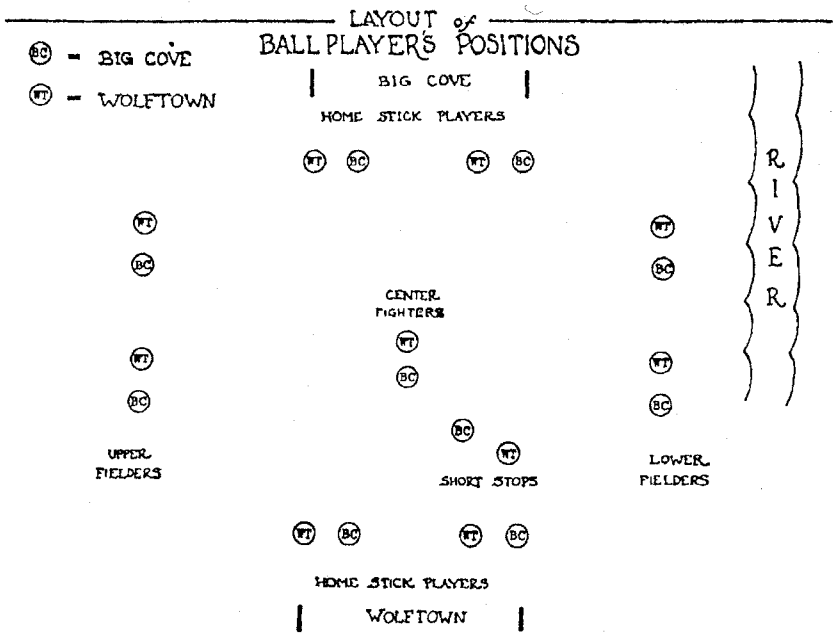

図1　Fogelson, R: The Cherokee Ball Games: A Study in Southeastern Ethnology, unpublished Ph.D. Dissertation. University of Pennsylvania, Philadelphia, 1962, p. 140 より転載

禁じられていたのだが，それらの骨が脆くて弱いことから，選手にこうした弱さが宿り，試合中に負傷することを避けたからである。同じような理由から子羊の四肢やホウレンソウのような青菜を食べることも禁じられていた。

食肉のタブーに追記しておくことは，肉類は赤身の部分だけが食べて良いのであり，脂肪分の摂取が禁じられていたことである。脂肪分は身体に過度の発汗を促すものと考えられ，避けるように指示されていた。

アルコールの摂取も禁止事項の一つであった。アルコールは自己管理を緩めて調整不足に陥れるものとして，候補選手は招集されてからはこれを摂ることを許されなかった。塩分の摂取は試合中，選手に渇きを与えるとして極力，避けるように指示されていた。

飲食に関するタブーのほかには接触してはならない人物の設定がなされている。月経中の妻を持つ選手の参加は認められなかった。月経中の血液は彼らにとって人間を弱らせる危険な存在として位置づけられている[10]。妻が妊婦の場合も参加が許可されなかった。これは，妊婦の体内に宿る子どもの存在が父親である選手の動きを鈍くすると考えられたからである。これらのタブーは神話の中でその威力が説かれ彼らの中で固く信じられていたのでる。

また，試合で使用するスティックは小さな子どもに触れられないように保管しておかなければならなかった。子どもの肉体の弱さがスティックに触れることによって伝わってしまうからである。

禁欲生活もまたタブーに含まれていた。選手がいかに強く，不屈の精神を持っていたとしても，性交にはそれらをすべて打ち消し，弱らせるものとされていたからである。

これらのタブーを犯すことなく試合前まで過ごすことができた候補選手から正式メンバーが選出されたのであった。

2) トレーニング

マネージャーによって召集された候補選手は実戦形式の練習を行う。未婚者のチームと既婚者のチームとに分けて行ったり，あるいは隣接する集落のチームと行ったり，多くの場合，3〜4時間を費やしていた。個人場面を想定した練習の場合，個人的な体力レベルが同等同士で組ませて行うように配慮されていた。こうした練習を数日間，継続して行い，呪術師が良い掲示を得られたときに試合の開催日が決定された。

こうした実戦重視のトレーニングよりも重要視されたのが呪術的トレーニングである。ここでは，呪術師はトレーナーとしての役割を担い，選手たちに呪術的な力を施術していった。

チェロキー族の間では，河川は神聖視された場所であり，日常生活の中でも重要な場所であった。河川の水の流れは彼らに宿った悪しき物を洗い流す意味合いがあり，重病の治癒や親戚，友人の死を浄化する際にも河川で儀式を執り行った。

試合の準備期間中に選手はたびたび，河川に出向いて飛び込んだり，あるいは屈んで顔や胸に水をかけたりした。さらに河川でスクラッチングと称される行為が行われた。これは実戦練習に対して呪術的トレーニングと受け取れるもので，むしろ実戦練習よりも重要視されていた。スクラッチングには，七面鳥の脚部の骨か翼部分の骨を鋭く研いだものを動物の腱か麻繊維でくくった櫛状の道具が用いられた。練習直後の汗ばんだ選手の体の片腕を持ち，肩口に用具を刺して肘の下まで引いていく。引き終えると今度は少し位置をずらして再度，肩口に刺し，同様に引いていく。この作業を計4回繰り返す。次いで同様の作業を前腕部に施し，反対の腕にも同じように行う。両大腿と両下腿部，胸部，肩から肩，背部にも繰り返し施すと全部で308本の傷跡が体に刻まれる。

別の方法は手の親指部分に用具を刺して上腕前部から胸部を斜行して上った後に，反対側に降下させて脚の親指まで引く。続いて手の小指から始めて上腕部裏を通過して背部を斜めに上がってから斜めに降下し，逆の脚部を通って脚の小指に到達する方法がある。裂傷の本数は合計で28本である[11]。

施術後，選手は河川に入って血液を洗い流し，7回潜り，傷口に7種の薬草を煎じた塗り薬を塗布した。

4と7という数字は彼らにとって聖なる数字であり[12]，これを体に刻み込むのに用具による痕跡から血が滲み出る程度の圧力を継続して引いていく。傷口が膿んで痛む選手は悪い血を出し切れてないか，敵チームの呪術師の呪いがかけられているとして試合参加を見送られた。このような出血させる行為は

周期的にも行われる。これはチェロキー族にとって体内の悪い血の排除と認識され，健康管理の一環を担うものでもあった。

スクラッチングの傷跡に用いられた塗り薬とは別に，薬草を煎じてつくる吐き薬が用意されていた。試合の4日か7日前になると，選手達は起床してから朝食を摂る前に呪術師と合流し，この薬を与えられて飲む。嘔吐させることで咽喉部から痰を取り除き，選手の呼吸能力を向上させるためである。嘔吐物は試合中の選手の活躍を予期する材料と見なされ，下流に流されていけば活躍が期待された[13]。

III. 試合前夜のダンス

1) 概要

勝利を祈願するためのダンスがゲームの前日，日が暮れて暗くなると同時に開始される（図2）。

ダンスに向けて選手，ダンスを踊る7人の女性ダンサー，見学者のために3カ所に焚き火が設けられる。ダンスの開催場所は直前まで秘密にされていた[14]ことから，これらの焚き火は試合前日の日没に呪術師とそのアシスタントによって点火される。ダンスが終わるまで焚き火には火守りがつけ，ダンスが終わるまで管理される。

ダンスはキツツキと呼ばれる役職が対戦相手の村落に向かって，少し走り出すのを契機に始まる。走り終えるといったん，立ち止まってから振り返り，叫び声をあげる。選手たちが形成する平行な2列の間を飛び跳ねながら叫んで通り，最後に大きく叫ぶ。選手たちはそれを合図に一団となって呼応する。その後，1列にまとまって反時計回りに焚き火を中心に周回し始める。ダンスのリーダーが彼らの先頭で誘導をし，リーダーが歌い始めると選手たちはそれに対して呼応する。これを数周，繰り返した後，ダンスのリーダーは合図を出して選手たちの周回を停止させる。そしてヒョウタンを乾燥させてつくったガラガラを力強く鳴らしながら叫び声をあげる。これに選手たちは呼応してから河川にて呪術師と合流し，禊を受ける。同時に自身が試合で使うスティックも一緒に持っていき，呪術師が呪文を唱え終えた後に河川にスティックを浸した。これとは別に，水際にスティックを浸して置かせ呪文をかける場合もあった。いずれの場合もスティックの能力が向上すると信じられていた。

選手たちが河川に向かっている間，女性ダンサーによるダンスが始まる。7人の女性ダンサーが対戦相手の村落方向に対面してスティックのかけられたハンガー後方に1列に整列する。女性ダンサーは各氏族から妊婦もしくは月経中の女性を除いて各1人が選び出される。ハンガーの下に座るドラマーがリズムにあわせて即興の歌を歌い，女性はこれに応える。

選手たちのダンス時間はおよそ20分であったが，女性のそれは1時間前後かかるものであった。彼女たちがダンスを終えると，河川に行っていた選手たちは戻り，キツツキが再度相手村落に向かって声をあげることでダンスは再開される。夜のうちに選手のダンスは7回を数える。

試合前の終夜のダンスを行っている間，選手たちは座ったり，横になったりしてはならず，常に緊張していなければならなかった。他の選手にもたれることは許されたが，それ以外の何かにもたれることが禁じられていた。

2) ダンスの道具

ダンスのリーダーが用いるガラガラはヒョウタンを乾燥させてつくる。くくれの基部に大きい穴を開け球状部分の反対側に比較的，小さな穴を開け，探り針でもって種を取り除き，小石を入れた。入れる小石が7個だったという報告もある[15]。ヒョウタンの穴は10インチのヒッコリー製の合い釘を隙間なく，開けた穴同士をつなぐようにして栓をした。ヒョウタンのくくれ下部から出た合い釘のおよそ6インチはそのまま把手となった。

ガラガラにはもう1種類あり，こちらは長いか湾曲したヒョウタンを用いた。くくれの部分自体が把手の役割を果たしたので，前出のガラガラとは異なり外側に取り付けるものはない。また，乾燥させた種を取り除かないで残し，音源にした。

これらには装飾として羽を飾りつけられたり，赤か黒に塗装されたりした。また，把手部分を彫刻加工したり，より糸を巻きつけて飾られたりもした。胴部分に不規則に穴を開けることで音色に変化を与える加工も見られる[16]。

ドラマーが使用するドラム本体の素材にはオークが用いられる。下方向に向けて先細るように裁断されたオーク材を合わせ，これを1インチほどのヒッコリーでできた輪でまためる。底部は丸板をはめ込

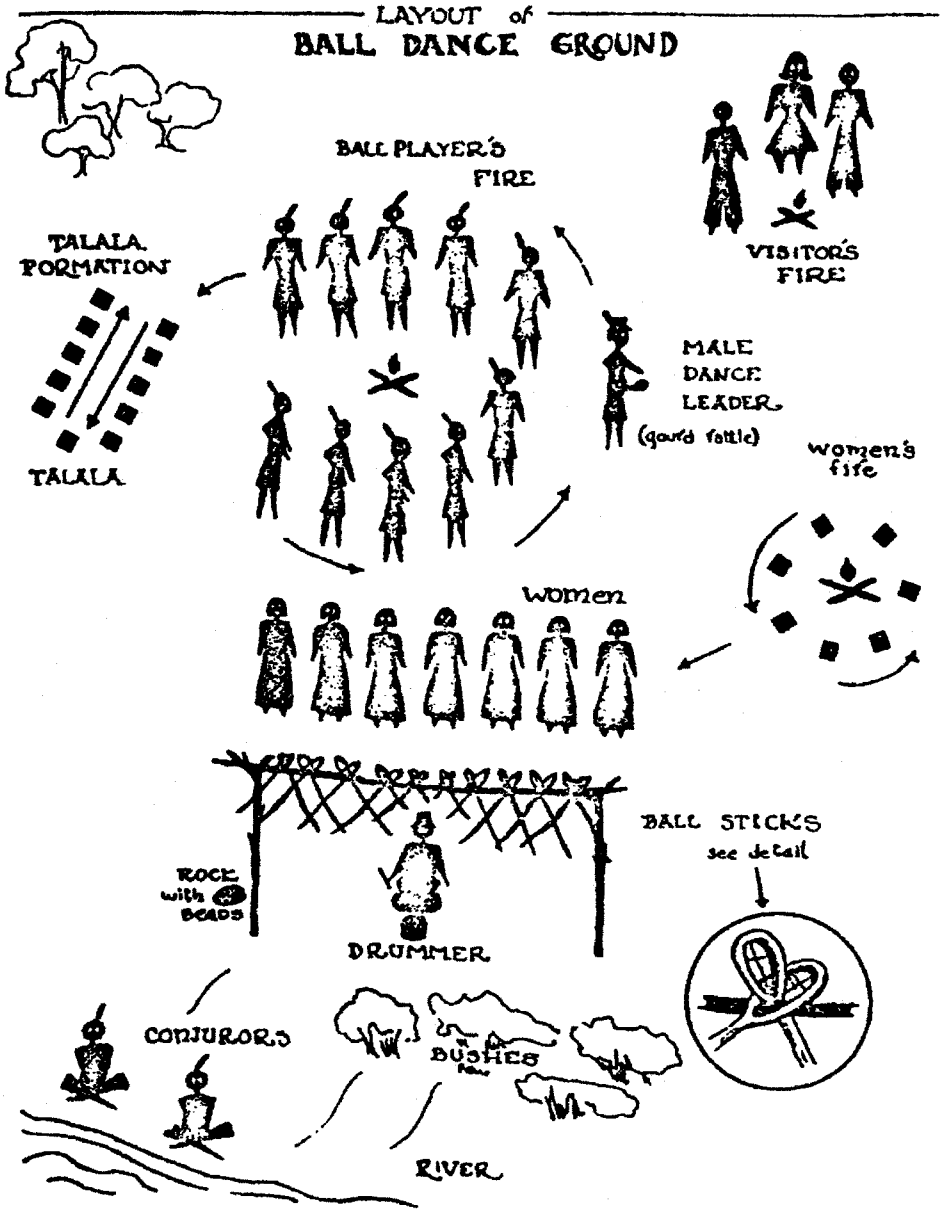

図2 Fogelson, R: The Cherokee Ball Games: A Study in Southeastern Ethnology, unpublished Ph.D. Dissertation. University of Pennsylvania, Philadelphia, 1962, p. 94 より転載

んで樹脂で接着する。頭部にはウッドチャック[17]の皮革をあて，ヒッコリー製の輪で固定する。この内部は調律に使用する水で満たされていた。そのために側部に穴を開けておき，使用時は栓をしていた。使用するときは水でもって頭部を湿らせ，ドラム用のスティックでもって叩いて音を出した[18]。

R. Fogelson がフィールドワークをした時代ではこうしたドラムの使用機会は極めて減少し，観光客をもてなす場合か人類学者が記録のために録音をするときに限られ，材質もブリキ缶のシリンダーが代用されていた。

試合前日の終夜のダンスを演出する特別な人員たちの道具が装飾で飾られるように，かつて選手たち自身も頭髪に羽根を飾りつけた。頭髪の羽根に加え

表1　Fogelson, R.: The Cherokee Ball Game: A Study in Southeastern Ethnology, unpublishsed Ph.D. Dissertation. University of Pennsylvania, Phiradelphia, 1962, p. 109 より和訳

生き物の名称	象徴する属性
シカ	迅速さ
キツネ	迅速さ
ガラガラヘビ	打撃力
モモンガ	捕球力
コウモリ	捕球力
ガン	迅速さ
オオガラス	明敏な視野
オオタカ	打撃力
Chimney Sweep	迅速さ，持久力，機敏さ
コノハズク	明敏な視野，捕球能力
ハイタカ	迅速さ，捕球能力
シギ	持久力，加速力
Squirrel Hawk Pewee	投球力，捕球能力
シラサギ	体力，明敏な視野
ワシ	体力，明敏な視野

てウッドチャック，イタチ，ガラガラヘビ製の皮革製ベルトからシカやキツネの尾をぶら下げた。選手たちが動物の毛や鳥の羽根を身につけるのは，それらの生き物が持ち合せると考えられる能力を自身にも宿らせるためである（表1）。

終夜のダンスの際の焚き火は試合前日の日没と同時に点火される。呪術師とそのアシスタントによって点火される。点火後，30分ほどが経過すると呪術師は焚き火の片側に熱を持った灰を掻き集め，「古いタバコ」を少量かける。これは悪魔祓いの儀式で，もし何事もなく燃えれば，万事うまく行われる掲示であり，逆に灰から火の粉が散ったときと舞い上がった場合は近くに魔女や悪霊が潜んでいることを示す。悪い掲示が出たとき，彼らは「古いタバコ」を一嗅ぎすることで後に降り掛かるだろう不吉な出来事から身を守れると考えた。「古いタバコ」は希少で貴重な品であるため，大抵の場合，日常で販売されているタバコと混ぜて薄めて使った。薄めて使用した場合の効用は呪いを退けるに過ぎないが，純正で使用した場合は魔女の肺にとどまって咳き込ませ，結核のような疾病を引き起こして死をもたらすと信じられていた。

常時，自チームに良い掲示が得られない場合，敵チームの炎を盗みにいかなくてはならない。敵の炎を盗むことができれば呪術師は自チームに働いている魔力を無力化できるのである。そのためすでに述べたように焚き火には火守りがついて管理するのである。この炎を盗む事例に関しては1711年と1725年にチェロキー族の中で生活した商人であるA. Alexander の記録によるもので[19]，かなり昔のことで R. Fogelson が調査したときには確認されなかった。

IV.　チェロキー族の球戯にかかわる道具

1)　スティックの製造方法

スティックは試合中，ボールの投補球のほかに相手選手を妨害するとき，もしくは相手選手からの妨害を防御するときに使われる。

材料には十分に成長したヒッコリーが使われる。比較的，瘤がなく直線に近い幹を探し出し，その側面を4-1/2フィートから5-1/2フィートの長さに伐り取る。樹皮を剥ぎ取り，両端部と側面の一部分を斧で垂直に切り落とし，長いかまぼこ状の木材にする。垂直に切り落とした断面をポケットナイフのような刃物でさらに平らに仕上げる。この木材のドーム状の側面中央から20インチ程の幅が1/4インチ未満の厚さになるように，先ほど垂直に切り落とされた面と平行に削られる。この部分が熱して木材を折り曲げた際にスティックのカップ状の部分になる。木材が適当に乾燥していれば簡単に折り曲げられるが，そうでなければ曲げやすくするために熱する必要があった。折り曲げた後，持ち手となる円柱部分を作り出すために刃物で丸みを出すように仕上げる。数週間，スティックを放置した後にカップ部分の側面にネットを張る留め具を取り付けるための穴を開ける。シカ，リス，ウッドチャックの皮，茎の太い雑草やヒッコリーの樹皮をねじったものが広くネットの材料として使われたが，現在では電線なども使われている。

スティックのカップと持ち手の境目を，選手の好みに合わせてわずかに曲げる加工をする場合がある。

1960年に採寸した12対のスティックからも見ても取れるように（表2），スティックの寸法は一定ではなく，かなりのばらつきが見られる。他のポジションに比べると特にセンター・ファイターが使用するスティックの寸法は不規則な傾向にある。チェ

表2 Fogelson, R.: The Cherokee Ball Game: A Study in Southeastern Ethnology, unpublishsed Ph.D. Dissertation. University of Pennsylvania, Philadelphia, 1962, p. 97 より和訳

全24本（12対）	平　均	差　異
全　長	22-/1/16 インチ	25-1/4～19-1/2 インチ
カップ部の長さ	6 インチ	7-5/16～4-13/16 インチ
カップ部最大幅	3-/1/2 インチ	4-1/2～2-7/8 インチ
ハンドルの直径	1-/3/16 インチ	1～1-5/16 インチ

ロキー族独自の文字を発明し，新聞を発行するまでに至った L. Lloyd が言うには1915年以前のセンター・ファイターのスティックはより特徴的であったようである。彼の記憶ではボールを十分に捕球しうる十字にネットを張られた小さなカップを持つ18インチ小のスティッは後にカップ部がより広くなり，30インチ大の物が好まれるようになったと言う。

当該球戯に使用するスティックの材質は軽量かつ丈夫なヒッコリーを用いている。ボールを捕球するためにカップ部にネットが張られる。現在のラクロスのそれが深く，やや袋状になっているのとは異なり引き締められた状態で張られている。

スティックもダンスの周辺用具のように装飾される。塗装，彫込み，火で炙ってツヤを出すといった装飾が施された。彫込みで顕著なのは稲妻を表すギザギザの線，ガラガラヘビに見える菱形の格子柄，カップ縁に見られるスカラップといったものであった。

多くのスティックは赤く塗られるか，ネットに赤い紐をからませる。コウモリの翼の一部，ツバメやハチドリの羽根の一部がカップ基部に備え付けられる。チェロキー族に伝わる球戯に関する神話の中でコウモリは唯一，得点をした動物で捕球力が高まる力があると信じられているからである。

終夜のダンスにおいてスティックは「ハンガー」に掛けられる。この構造は2本の直立した叉状の棒の先端に1本の棒を横たわらせることによって構成される。スティックを2本1組にして，一方のカップ部にもう一方の持ち手部分を通して一緒に引っ掛けておく。ハンガーにはコウモリの翼，羽根，ヒョウタン製のガラガラ，ドラム，その他に難解な物が吊るされる。ドラマーはこの真下に座ってドラムを叩き，ダンスのリズムを演奏する。

チェロキー族が行っていた a·ne·tsó のゴールは2本の直立した棒を立てたものであり，クロスバーがない。しかし他の近隣部族が行うラケット球戯のゴールにクロスバーが見られることから，ハンガーの構造はかつてのゴールの姿の名残とも考えられる。

2) ボールの種類

通常，試合に使うボールは普通，挑戦者側のチームが用意した[20]。しかし慣習として両チームのダンスに持っていき，スティックとともに儀礼的な処置が施された。数夜の間，ボールはセンター・ファイターのスティックのネットに収めて保管された。

ボールの製造に使われる材料は実にさまざまである。鳥と四足獣とで行われた球戯の神話の中で使われたボールは，ビー玉ほどの大きさの小さな硬い果実であった。また，伝承に基づいたボールとは，木の実か毛で覆われた動物の皮であった。

以前はシカかリスの皮にシカの毛，もしくは菌類を入れたものをボールとして使用していた。現在では紡ぎ糸を堅く巻いたもの，布を結んだもの，小さなゴムボールを試合球に使っている。J. Mooney の報告によればシカ革の袋にシカの毛を詰めたものをボールとして使用していた[21]。これと同じ製法のボールは，ノースカロライナ州にあるチェロキー博物館に展示されている。このボールの寸法は直径およそ1インチで野球のボールの製法と同じように，2枚のシカ革を縫い合わせたものである。ボールの中に詰める材料としてシカの毛のほかに，人の髪を入れた場合もある。また，特別な薬草や尺取虫，ノミを入れたとの報告もある。これらを入れるのは，いずれもボールの動きを活発にするためである[23]。いずれの材質を用いた場合でもボールは軽量で，球状に近い形状を求めている。投球による飛距離と直線的な転がりには機能を発揮するが，ボール自身に

弾む能力が欠けるため，以上のような特別な物質を中に入れると考えられる。

L. Sequoyah によればさらに古い時代においてボールはシカかクマの筋肉をシカの皮で覆い，シカの毛で縫い上げたものであった。チェロキー族が居住していた東部エリアでシカが実質，絶滅していた時期があり，ほかのものが代用品として使われた。L. Sequoyah は代用品についてキュウリの芽とマッシュルームをなめし革かリスの皮で覆ったものが使われたことを教えてくれた。

V. 結　　び

チェロキー族の球戯は1950年代においては日常的に行われるものではなかった。しかし，その昔，戦争のための模擬戦として実施されていたこの球戯は年に1度行われており，実際に試合を開始するに至る儀式にチェロキー族固有の特色が見られた．その結果整理すると以下のようにまとめられる。

①選手の選考には幾つかのタブーが呪術師によって設定される。タブーは飲食関連のものが多く，これらの摂取が選手の肉体に悪影響を及ぼし，試合中に不調を来たすと考えられたことから，これを破った選手は代表候補から外される。

②試合のための選手の体調は呪術師によって管理される。練習期間に施される呪術的トレーニングとも言えるスクラッチングに関してはチェロキー族の聖数である4と7の乗数を体に刻みこむことで選手の能力を引き出そうとした。また，その施術場所も彼らにとって神聖な場所である河川で行うことから，スクラッチングの重要性がうかがえる。

③球戯に使用するスティックの製造方法は，巧手な技術が必要とされる。スティックは選手が参加する儀式イベントに何らかの形で常備される。また，選手同様にタブーが課され，河川に浸して清めるという行為はこの道具が擬人化された身体の延長であると認識されていることがうかがえる。その構造は先端部に捕球をするためのネットが張られたカップ部を有する棒である。材質には丈夫で軽量なヒッコリーが用いられた。

④ボールは挑戦者側のチームが用意するが，試合中はどちらのチームのものでもない公平な存在であるためか，儀式的な施しは報告されていない。その製造方法は，1) 木の実をそのまま使用する，2) 糸や布を巻いたもの，3) 動物の毛を革で包んだものが報告された。この詰め球に関してはボールの機能を高めるために尺取虫かノミを入れるといった事例がある。球状で軽量だが，弾力性は乏しい。

⑤以上のことからスティックとボールの機能と構造を述べる場合，当該球戯のゲーム特性を含めて考察しなければならない。選手間の接触を規制しないこの球戯において，ボールをスティックに保持して移動する（ドリブル）ことは困難で，試合展開は投球によるパスが主流と考えて良い。

ここで求められるスティックの機能は，相手選手からの妨害に耐えうる耐久性と，手の延長線として優れた操作性を実現する軽量性である。それによって軽量で丈夫なヒッコリーが材質として用いられる。地面からボールを拾い上げやすくするために棒の先端にネットが張られたカップ部分を有する。ただしネットは緊張した状態で張られているので，両手に各1本持ったスティックでボールは挟むようにして扱う場面が多い。ボールには飛距離が求められるため，軽量でありながら，ある程度の重量が求められる。そのためボールの弾力性を欠くが，内部に材料を詰め込んだ球状である必要がある。

以上のようにチェロキー族の球戯，a･ne･tsó は開催にあたって終始，彼らの信仰する宗教観がつきまとう。それは球戯に使用するボールとスティックにも及ぶ。球戯事態は選手同士の激しい接触を禁止しない上で早い展開が求められるため，周辺用具にはこれを成立させる機能が求められた。

注記および引用・参考文献

1) シカゴ大学に勤める人類学者。本稿は彼の博士論文である『The Cherokee Ball Game: A Study in Southeastern Ethnology』（チェロキー族の球戯：南東民族学の研究）を基本資料としている。1957年に Dr. John Gulick のフィールドワークチームの一員として，1958年にはノースカロライナ大の援助を受けてフィールドワークに参加し，これを基に執筆している。

2) 寒川恒夫：「スポーツ人類学の研究史」『スポーツ文化論』所収，初版，杏林書院，pp. 3–8, 1994.

3) 当時，失われていく文化を救い上げるような研究スタイルから，サルベージ人類学と呼ばれるようになった。
4) ミシシッピ州に居住する部族であり，チェロキー族と似たラケット球戯を行っている．現在では競技連盟を持ち，活動を行っている。
5) Fogelson, R.: The Cherokee Ball Game: A Study in Southeastern Ethnology. unpublished Ph.D. Dissertation. University of Pennsylvania, Philadelphia, p. 1, 1962.
6) Sequoyah 字音表は 86 の文字から構成されている。新聞は「チェロキー・フェニックス」の名で 1821 年に刊行された。
7) 他の 9 種はシニー (Shinney)，ダブル・ボール (Double ball)，ボール・レース (Ball race)，フットボール（フットボール），ハンド・アンド・フットボール (Hand-and-foot ball)，トス・ボール (Tossed ball)，フット・キャスト・ボール (Foot-cast ball)，ボール・ジャグリング (Ball juggling)，ホット・ボール (Hot ball)。
8) Fogelson, R.: 前掲書，pp. 139–142.
9) チェロキー族に語り継がれる鳥類と四肢動物とで行った球戯の神話の最後でウサギは以前の親類である鳥類に復讐をする。
10) Mooney, J.: Myths of the Cherokee: 19th Annual Report of the Bureau of American Ethnology, 1897–1898, Part 1. U.S. Government Printing Office, Washington, pp. 319–320, 1900.
11) Starr, F.: American Indians: Ethno-Graphic Reader, Vol. II. D.C. Heath, Boston, pp. 145–146, 1898.
12) 寒川恒夫:「選手の宗教的トレーニング」『図説スポーツ史』所収，第 5 刷，朝倉書店，pp. 24–27, 2000.
13) Olbrechts, F.: Some Cherokee methods of divination: Proceedings of the 23rd International Congress of Americanists, New York, p. 550, 1930.
14) Mooney, J.: The Cherokee ball play: American Anthropologist, Old Series, Vol. 3, p. 114, 1890.
15) Parris, J.: The Cherokee Story, Ashville, N. C., The Stephens Press, p. 99, 1950.
16) Soeck, F. and Broom, L. (in collaboration with Will West Long): Cherokee Dance and Drama, Barkeley and Los Angeles, Univ. of California Press, p. 22, 1952.
17) 北米産のモルモットのこと。
18) Mooney, J.: 前掲書，p. 116.
19) Corkran, D.: The sacred fire of the Cherokees: Southern Indian Studies, Vol. 5, pp. 22–23, 1953.
20) Mooney, J.: 前掲書，p. 128.
21) Mooney, J.: 前掲書，p. 111.
22) Fogelson, R.: 前掲書，p. 100. L. Sequoyah からの聞き取り調査による。